

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

## 教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

# 報 告 書

プログラム名	幼保統合の現職研修のためのモデル・カリキュラム開発 - 実践分析とカリキュラム作成を往還させる保育力量の形成 -
プログラムの 特徴	幼稚園の教員と保育所の保育士が合同で、公開保育等、実践例を具体的に示しながら意見を交換するという、文字通りの合同研修を通年的に展開し、さらにその成果を「奈良市幼保統合のカリキュラム」に反映させた。

平成 2 2 年 3 月

奈良教育大学

奈良市教育委員会



## 開発の目的・方法・組織

### 1. 目的

長らく日本の就学前教育は、幼稚園と保育所の二元化を前提に進められてきた。しかし、近年、働く母親の増大化が進展し、乳児期から保育所に通う子どもも増えてきた一方、幼稚園も3歳入園等、低年齢化の傾向にあり、午後の預かり保育も普及してきている。こうした保育ニーズの増大は、単に母親の就労の増大という要因だけでなく、少子化の下、子どもを子どもの中で育てたいという親の願いや、子育ての知恵が自然発生的には習得できず、親業すら学びの課題になってきたという、親にとっても子どもにとっても育ちの場が社会的に構築・保障される必要が出てきたことによる。こうした状況を背景に、幼保一体型施設の取り組みや認定子ども園の制度化など、幼保の垣根を越えた保育形態が国及び地方レベルで模索されている。こうした少子化の下での保育ニーズの増大と制度的動向の結果、保育者には幼保の双方に対応する力量が求められるようになってきている。幼稚園児・保育所児にかかわらず、教育と養護を統一した「保育」が等しく保障されるべきであるという認識は決して新しいものではないが、今日的情勢の中で新たな広がりを見せている。

奈良教育大学では平成19年度採択の文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム「幼保統合の『保育実践知』教育プログラム」（幼保GP）を展開し、その中ですでに奈良市教育委員会と緊密な連携をとり、養成教育と現職教育を一体的に捉えながら、現職教育の質的向上にも関わってきた。

本プログラムはこれらの成果と教育委員会との連携の実績を活かし、上記のような社会的要請の下で、幼稚園・保育所の現職保育者に等しく求められる力量の明確化とその向上を図るために、実践検討に基づく実践の振り返りを集約し、その成果を「幼保統合のカリキュラム」にまとめることを柱に、幼保統合の現職研修のモデル・カリキュラムの開発を試みた。

### 2. 方法

#### 2-1. 体制

プログラム開発の中心を担うべく、奈良教育大学及び奈良市教育委員会の6人が運営協議会を構成した（次頁表1参照）。研究員は、プログラム終了後も各園で核となって実践していけるよう奈良市全体を俯瞰して公立・国立幼稚園から10名、公立保育所から10名が選ばれ20名となった。

表 1 運営協議会委員一覧

No.	所属	氏名	担当・役割
1	奈良教育大学 教育学部 教授	瓜生 淑子	全体統括・大学側責任者
2	奈良教育大学 教育学部 准教授	横山 真貴子	開発取組の企画・運営担当
3	奈良市教育委員会事務局 学校教育課 課長	石原 勉	教育委員会側責任者
4	奈良市教育委員会事務局 教育企画課 指導主事	松本 知子	事務局 認定こども園関係担当
5	奈良市教育委員会事務局 教育企画課・ 奈良市保健福祉部保育課 兼務 主任	江波 多美子	保育所関係担当
6	奈良市教育委員会事務局 学校教育課 指導主事	中田 章子	幼稚園関係担当

## 2 - 2 . 内容展開の特徴

研修では幼保の保育者に等しく求められる実践分析力の養成を位置づけ、「保育案作成」「保育記録の作成」と「保育のふり返し」を、公開保育の場で集団的に行うことを重視した。研究員が一堂に会した公開保育だけでなく、所属園ごとの園内公開保育の成果を研修会で報告し、実践を議論し合う形態も取った。

研修例会を年間を通じて展開することとした。

研修成果を「幼保統合の保育カリキュラム」（後述）として集約した。

全国の幼稚園・保育所の先進事例を学ぶために、グループ単位で視察研修を取り入れた。

### 研修プログラムの実施

#### 1 . 1年を通じた研修会の展開

研修会は9回実施した（主に土曜午後実施）。9回の流れは前頁の図3参照）。第3回研修会では連携幼稚園の公開保育に参加し議論しあった（保育所での同様の研修会は新型インフルエンザ



9月研修会（保育案をもちよって）

による休園のため中止となった）。最終の2月研修会では、研究員が自園で取り組んだ園内公開保育の取り組みを交流した後、各自の1年間の研修成果を報告しあった。次頁より研修会の具体的内容・成果を示していく（公開保育の保育案の一部は巻末資料に示した）。

第 1 回 研修会（平成 2 1 年 4 月）

日 時	平成 2 1 年 4 月 2 5 日（土） 1 3 : 3 0 ~ 1 6 : 0 0
内 容 講 師	オリエンテーション 奈良市教育委員会事務局 学校教育課長 石原 勉氏 講 演 「保育実践における特別支援について」 奈良教育大学 特別支援教育 教授 玉村公二彦氏
会 場	奈良教育大学 大会議室 （奈良市高畑町）
参加者	研究員 2 0 名、運営委員 6 名
目 的	1 ) オリエンテーション：現職研修カリキュラム趣旨説明。 2 ) 講演：今日的課題である保育における特別支援教育的支援について、年度当初に学ぶ。
日 程	1 3 : 3 0 開 会 第 1 部 オリエンテーション ・委員、研究員の自己紹介 ・研修のコンセプト、研修カリキュラムの説明、配付資料の活用方法について（石原 勉氏） ・休 憩 1 4 : 3 0 第 2 部 講演 「保育実践における特別支援について」（玉村公二彦氏） 1 6 : 0 0 閉 会
概 要	オリエンテーションでは、各委員、研究員の自己紹介の後、「現職に求められる力量の明確化とその向上を図るために、実践検討に基づく実践改善力、実践の振り返りを集約したカリキュラムの作成とその活用力等、幼保に対応した現職研修のモデル・カリキュラムを開発することを目的とする」という、本現職研修カリキュラムの趣旨説明を行った。次いで、今後の研修のあり方、配付資料「福山市保育カリキュラム」についての説明を行い、最後に、石原氏による「奈良市の幼児教育の現状と展望」について、講義を受けた。 講演では、現在、保育現場では、特別な配慮を要する「気になる子ども」について、症状や障害を理解し、指導の際には長い見通しをもち、集団参加の困難さを理解した上で、支援していくことの必要性などが述べられた。
成 果	奈良市の現状を踏まえた上で、今、なぜこうした現職研修が必要なのか、運営委員、研究員の間で共通理解を図ることが目的だった。幼保を統合する現職研修として、幼稚園教諭・保育士が一堂に会し、奈良市の保育の質の向上に向けて、第一歩を踏み出すことができた。

第2回 研修会（平成21年5月）

日 時	平成21年5月30日（土） 13:30～16:30
内 容	講義・演習 「保育実践における絵本の意義と絵本の読みあい演習」
講 師	奈良教育大学 幼年教育 准教授 横山真貴子氏
会 場	奈良教育大学 第1会議室 および「えほんのひろば」（奈良市高畑町）
参加者	研究員18名、運営委員6名
目 的	保育の中で頻繁に取り入れられる絵本について、子どもの発達の様相や絵本の特徴を踏まえ、実践の場に取り入れていく方法を学ぶ。
日 程	<p>13:30 開 会</p> <p>第1部 講義 保育実践における絵本の意義（第1会議室）</p> <p>14:30</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「『わたしの1冊』について」記入</li> </ul> <p>15:00</p> <p>第2部 絵本の読みあい演習（えほんのひろば）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「わたしの1冊」の絵本紹介</li> <li>・グループに分かれて絵本の読みあい演習</li> <li>・全体での意見交流</li> </ul> <p>16:30 閉 会</p>
概 要	<p>第1部の講義において、まず保育現場における絵本の意義と活用方法についての理論を学んだ。新「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」における「絵本」の位置づけを確認した上で、保育実践における絵本の意義として2点、「子どもと絵本の出会いをつくり、広げる」、「想像する楽しさ・心の通いあい・やすらぎを育む」が提案された。これらの意義の観点から、研究員の日頃の保育実践における絵本の活用方法について、振り返ることが求められた。</p> <p>第2部では、前もって持参することが課されていた「わたしの1冊」（保育実践等において印象に残っている絵本）を、研究員それぞれが参加者全員に向けて紹介した。その後、幼稚園教諭、保育士の混合グループ（5人）で、持参した絵本を読みあい、感想を伝えあった。さらに「えほんのひろば」の絵本から、各自1冊ずつ選び、2度目の読みあいを行った。読みあい終了後は、保育実践での絵本の活用方法について、意見交換を行った。</p>
成 果	本プログラムは、内容的にも、人的にも「幼保統合の現職研修」を目指すものである。第2回となる今回の研修会では、幼稚園教諭と保育士の研究員の交流も位置づけ、演習では、意図的に幼保の研究員の混合グループを構成した。その結果、グループ内では研究員同士のやりとりが活発に行われ、幼保の保育者をつなぐ関係構築の第一歩となった。

第3回 研修会（平成21年7月）

日時	平成21年7月3日（金） 9：00～14：00
内容 講師	演習 「公開保育と実践検討（幼児編）」（奈良市立伏見幼稚園） 奈良女子大学 准教授 本山 方子氏
会場	奈良市立伏見幼稚園（奈良市菅原町367）
参加者	研究員 20名、運営委員6名。 その他、奈良市立幼稚園・保育園の保育者65名。合計91名。
目的	公開保育の場を通じて、実践を振り返る力、実践分析力の形成を目指す。 保育記録を作成する観点、技術を学ぶ。
日程	9：00 公開保育 11：30 休憩 12：00 研修 ・本日の保育について（伏見幼稚園職員） ・質疑応答 ・指導助言（本山方子氏） 14：00 閉会
概要	年少（4歳児）3クラス(60名)と年長（5歳児）2クラス(49名)の保育参観後、保育を担当した教諭から本日の保育についての説明、振り返りがあった。その後、質疑応答、本山氏による指導助言が行われた。 質疑応答では、「保育室のコーナー設定」、「子ども同士の関係づくり」、「遊びにおける安全確保」、「指導案の記述について」、「子どものことばの豊かさ」などについて、主に保育所保育士から感想や質問が出された。幼稚園教諭がそれに答え、両方で意見交換を行った。保育時間や担任の人数など、幼保の保育形態の違いを改めて実感したという保育士の感想もあった。そうした違いに触れながら、同じ保育を参観しても、幼保の保育者で、その捉えが異なることが明らかになった。また保育所保育士からは、幼稚園の保育の参観から、自らの保育所保育をふりかえり、密度の濃い保育のあり様を考えていく必要があるとの意見も出された。 本山氏の指導助言では、今後に向けて「『好きな遊び』の捉え」、「保育者のことばかけ」、「指導案と記録」の3点について見直していくことが提案された。
成果	幼保の保育者が一緒に幼稚園の保育を参観し、意見交換することによって、双方の保育の捉えの違いが浮き彫りになった。主に保育士から感想・意見が出されたが、それを聞き、応えることによって、幼稚園教諭も自らの保育についてふりかえり、新たな視点を開く機会となった。また、双方の違いに気づくことは、相互理解を深める第一歩である。保育者の幼保統合にもつながる研修となった。

第4回 研修会（平成21年7月）

日時	平成21年7月25日（土） 13:30～16:30
内容 講師	講義 「保育カリキュラムから発達及び保育者による援助を学ぶ」 前福山市児童部福祉課 指導保育士 岡崎 真智子氏 前福山市保育連盟会長 飛田 美保子氏
会場	奈良教育大学 大会議室（奈良市高畑町）
参加者	研究員17名、運営委員6名。 その他、奈良市立保育園の保育士90名。合計113名。
目的	・実践とカリキュラムの関係を学ぶ。 ・一般的記述から、個々の発達の姿を捉える。
日程	13:30 開会 講演(1)「福山市保育カリキュラムと保育実践の往還」（岡崎真智子氏） 15:00 講演(2)「幼児の保育実践とカリキュラム」（飛田美保子氏） 16:30 閉会
概要	『福山市保育カリキュラム』は、本研修において、研究員全員に配布した研修資料である。そのカリキュラム作成の中心的な役割を果たされた2名の先生を講師に迎え、実践とカリキュラムの関係、日々の保育の記録からいかにカリキュラム作成につながるのかなどを、その作成過程から学ぶことが目的である。 講演(1)では、岡崎氏より「カリキュラム作成の過程」と「福山市の乳児保育の現状」について説明があった。福山市のカリキュラム作成上の大きなねらいとして2点、「福山市の実態にあったもの」、誰にでも伝えることができ、明日からの保育実践に役立つ「具体的でわかりやすいもの」が挙げられた。 講演(2)では、飛田氏より「幼児の保育と保育者の援助について」の説明があり、子どもに「語りを届ける」、「居場所をつくる」、「思いを大切にすること」といった「ていねいな保育」をすることを心がけてきたことが語られた。 講演を受けての質疑応答では、「乳児保育の担当制について」、「記録をとること」について議論がなされた。
成果	本開発プログラムは、保育者の「実践分析」「保育記録の作成」と「保育カリキュラムの作成及び利活用」を往還させることにより、現職保育者の力量向上を目指すものである。本研修では「保育記録の作成」の重要性と記録の取り方について、講師と参加者の間で具体的なやりとりがあった。また、研究員の研修後の感想には「『保育の一場面をメモすること』から始めていきたい」といった記述も見られた。研修がプログラムのねらいに沿って展開しつつあることがうかがえた。

第5回 研修会（平成21年9月）

日 時	平成21年9月26日（土） 13:30～16:30
内 容 講 師	講義・演習 「保育案の意義と役割」 帝塚山大学 教授 清水 益治氏 奈良女子大学 准教授 本山 方子氏
会 場	奈良教育大学 大会議室 （奈良市高畑町）
参加者	研究員18名、運営委員6名
目 的	保育案を実践の腹案として作成することで、実際の保育における保育者の応答的働きかけの技量が形成されることを理解する。さらに、自分たちの保育案を持ち寄りグループ討議することで、保育案と実践の関係について理解を深める。
日 程	13:30 開 会 13:35 講 義 (1)「保育所保育指針の告示化と保育案」（清水益治氏） (2)「幼稚園教育要領改訂と保育案」（本山方子氏） 14:40 保育案紹介(1)保育所保育案 (2)幼稚園保育案 15:20 保育案交流（グループ討議） 15:50 まとめ (1)グループ討論の報告(2)講師の先生方から 16:30 閉 会
概 要	<p>保育案の意義と役割について講義を受けた後、研究員作成の保育案について、幼稚園・保育所から各1名ずつ報告した。その後幼保混合のグループに分かれ、意見交流を行った。今回の研修にあたって研究員は、事前課題として8月14日までに「保育案」を提出し、研修前には全員分の保育案のコピーを手に入っていた。</p> <p>前半の講義では、新「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」と「保育案」の関連について述べられ、これから求められる保育を行うためには、保育案の作成について、今ここで振り返っておくことが必要だと指摘された。</p> <p>後半は、研究員の保育案紹介とグループ討議が行われた。幼保混合のグループだからこそ、両者の「保育案」の概念、形式、作成などの違い、しかし共通にある子どもたちへの思いなど、多様な観点から活発な議論が展開した。これらの議論の結果は全体に向けて報告され、さらに講師の先生方から「一貫性」と「連続性」、「対応性」をキーワードに、今後の保育案作成の視点をまとめていただいた。</p>
成 果	事前に保育案に目を通し、目の前にその保育案を置いてのグループ討議は、具体的な内容、観点での議論を可能にした。また、幼保混合のグループ編成により、それぞれの特色を踏まえた議論ができた。さらに、議論を総括する講師のコメントを得て、各研究員も保育案作成における各自の課題とその解決に向けて、取るべき方策のヒントを得たようだった。

第6回 研修会（平成21年11月）

日 時	平成21年11月28日（土） 13:30～16:30
内 容	講義 「乳幼児保育総合化の取り組みについて」
講 師	栗東市健康福祉部・教育委員会学校教育課 参事 久保ハルミ氏 視察研修報告 県外研修についての報告会 各研究員
会 場	奈良教育大学 大会議室 （奈良市高畑町）
参加者	研究員19名、運営委員6名
目 的	1) 近隣地域の幼保の総合化の制度的取り組みから、その経過と成果について学び、今後の幼稚園・保育所の在り方を考える。 2) 視察研修の報告を受ける。
日 程	13:30 開 会 13:35 講 義「乳幼児保育総合化の取り組みについて」 (久保ハルミ氏) 15:00 休 憩 15:10 視察研修報告会 品川区立第一日野小学校・第一日野幼稚園（幼小連携） 新宿区立四谷子ども園（認定子ども園幼稚園型） 品川区立一本橋保育園（認定子ども園保育所型） 16:25 事務連絡（今後の予定、出張計画等） 16:30 閉 会
概 要	近隣の自治体で幼保一体型施設が開設されている滋賀県栗東市より、その制度化にかかわってこられた久保氏を招いて、取り組みの経過と成果・課題について講義を受けた。ベッドタウン化が進行し、保育ニーズの増加してきた栗東市では、1998年（H10）に担当課として幼児課を設置し、乳幼児保育総合化を具体化していき、2003年（H15）1月には「栗東市乳幼児保育基準年間指導計画」（幼保統合のカリキュラム）を完成、4月より幼保の総合化をスタートさせた。公立園に関しては、長時間保育課程（従来の保育所に対応）・中時間保育課程（パート親に対応できる）・短時間保育課程（従来の幼稚園に対応）の3課程に再編された。現在、幼保一体型幼児園4園、幼保連携型幼児園1園に加え、幼稚園機能型4園、保育園機能型5園が総合化を担っている。総合化に先立ち、その3年前から順次、幼保の園長・主任級の人事交流を開始、1年前には一般保育者の人事交流も開始した（1997年より免許併有が採用条件になっている）。こうした制度化は、「保育に欠ける、欠けない」といった区分では就学前児に対応できなくなっているという認識から、子どもの権利と親の就労・子育てへの支援を保障するシステムとして、福祉と教育の壁を取り払い取り組まれてきた。実際、幼児園では子どもたちは、保育時間にかかわらず仲良く遊んでいる。課題は、二元化行政の下、事務処理は二元化されざるを得ないこと、施設の大規模化傾向があることであろう。
成 果	具体的な取り組みを聞くことで、幼保をめぐる課題への認識が共有できた。学区別説明会など、合意形成の努力の必要性がわかった。年間指導計画は即、参考になる。視察研修からは、様々な創意工夫が地方レベルで制度的にもとり組まれていることが分かった。

第7回 研修会（平成21年12月）

日 時	平成21年12月19日（土） 13:30～16:30
内 容 講 師	講義 「子育て支援の施策と課題」 奈良教育大学 教授 瓜生淑子氏 講義 「子育て支援に位置づけた発達支援について 大津市の取り組みより」 大津市子育て支援センター 主幹 西原睦子氏
会 場	奈良教育大学 大会議室（奈良市高畑町）
参加者	研究員19名、運営委員6名
目 的	子育て支援の施策の展開について把握する。さらに、子育て支援で大きな課題である発達支援について、大津市の取り組みの成果と課題を学び、幼保の役割とネットワーク作りを考える。
日 程	13:30 開 会 講 義「子育て支援の施策と課題」（瓜生淑子氏） 15:00 休 憩 15:10 講 義「子育て支援に位置づけた発達支援について 大津市の取り組みより」（西原睦子氏） 16:25 事務連絡（今後の予定） 16:30 閉 会
概 要	前半の講義では、冒頭でNHK番組「しのびよる貧困 子どもを救えるか」（09年10/4放送）が紹介され、日本の子どもの貧困率等の深刻さが示された。次に、戦後の幼稚園教育要領・保育所保育指針を振り返り、90年代末の改訂から、地域のセンター的役割が明記されるようになってきたことが報告された。今世紀に入ると、「子どもと家族を応援する日本重点戦略」に見られるように、全ての子育て家庭に目を向ける政策動向がある。しかし、与党の待機児童対策でも保育の最低基準見直しを言うなど、現行の水準の切り捨てによって働く母親の増大化政策が進められる心配がある。幼保の枠を超えた、子どもの育ちを前面に据えた地域再生の一環として「社会的子育て」を位置づけていく必要があるという話がされた。 後半の講義は、大津市子育て支援センター「ゆめっこ」で発達相談員をされている西原氏によるもので、発達がゆっくり目の子や食べる・寝るなどに課題を持つ子、新しい人や場所が苦手な子を持つ親に対して、乳幼児健診事業との連携の中で、子育て支援と発達支援を支援の両輪として発達支援療育事業に取り組んでいることが紹介された。同事業は、幼稚園や保育所の大きな集団に入る前の2・3歳児に、小集団での遊びを中心にした関わりの場を作り、同時に親の不安な気持ちを支える役割を持っている。幼稚園や保育所だけでなく、小学校や特別支援学校との連携も始まっているようだ。
成 果	幼稚園・保育所に求められる役割も社会状況や国の政策によって拡大されてきていることや、地域の子育て支援事業と幼稚園・保育所との有機的連携の中で、就学前児の発達支援が実現される必要性が示された。

第8回 研修会（平成22年1月）

日 時	平成22年1月23日（土） 14:00～16:30
内 容 講 師	講義 「保育力量形成のための職能成長モデル」 奈良教育大学 准教授 中井隆司氏 視察研修報告 各研究員の発表による視察研修報告会 各研究員
会 場	奈良教育大学 大会議室 （奈良市高畑町）
参加者	研究員18名、運営委員6名
目 的	1) モデル・カリキュラムの中心である職の成長について学ぶ。 2) 先進地域の保育視察研修についての報告を受ける。
日 程	14:00 開 会 講 義「保育力量形成のための職能成長モデル」(中井隆司氏) 15:30 休 憩 15:40 視察研修報告会 ゆうゆうのもり幼保園（幼保連携型認定こども園） 16:20 事務連絡（今後の予定） 16:30 閉 会
概 要	前半の講義では、幼稚園・小学校での運動遊び・体育の事例が示され、保育者の指導力量について討論した。次に職能成長では、「省察能力」が重要であり、常に「反省的实践家」としての教師（保育者）が期待されることが述べられた。また、演者が関わっている幼稚園での園内研修会の様子が紹介された。リフレクションシートが効果的であるとのことだった。質疑では、運動遊びの具体的指導に議論が湧いた。 視察研修報告会では、私立園で総合モデル事業以来、存在が注目されているゆうゆうのもり幼保園で、子どもたちが張り巡らされた大きなネットでのびのび遊んでいる姿が示され、「子どもが主体の保育が原点となっている」ことが納得できた。
成 果	保育者としての職能成長について、ビデオを交えた具体的な提起を受け、活発な質疑討論ができた。先進園での様々な取り組みの報告からは、新しい発想を得た。

第9回 研修会（平成22年2月）

日 時	平成22年2月27日（土） 13:30～16:30
内 容 講 師	演習 研修のまとめ 園内公開保育の報告 伏見幼稚園教諭、都南保育所保育士 視察研修報告 国外研修についての報告会 奈良教育大学教員 瓜生淑子氏、横山真貴子氏
会 場	奈良教育大学 大会議室（奈良市高畑町）
参加者	研究員18名、運営委員6名
目 的	1) モデルカリキュラム開発プログラムの取り組みのまとめ。 2) 先進地域の保育視察研修についての報告を受ける。
日 程	13:30 園内研修の取り組み報告 伏見幼稚園（保育者） 都南保育所（保育者） 15:40 視察研修報告会 ニュージーランドの保育事情 16:00 研修をふりかえって 研修員・運営委員から 16:30 閉 会
概 要	<p>本プログラムでは、保育案作成・保育記録・その振り返り活動を重視し、それに関する講義や公開保育の検討会を行ってきたが、秋以降、研究員が所属園で園内研修として公開保育を実施し、その成果を年度末に持ち寄ることを共通の課題として取り組んだ。研修会では、幼稚園からは、保育記録として空間的な活動記録の工夫が紹介された。保育所からは、1年間の学習の成果として保育案・記録に意識的に取り組んだことが紹介された。</p> <p>視察報告では、早期に幼保一元化がなされたニュージーランドの保育事情について、一元化後も幼稚園・保育所など様々な形態が併存していること、2007年導入の週20時間までの無償教育導入により、保育所の比重が高くなっていることなどが紹介された。また、ラーニング・ストーリーという個々の子どもについての記録がどの園でも取り組まれており、日本でも今後、参考になることが紹介された。</p> <p>1年の活動の振り返りでは、通年の研修に取り組む苦労もあったが、保育案について幼保の保育者の議論や県外視察など、これまでの研修では得られない学びがあったこと、今後もこのような研修の場を続けていって欲しいことなどが語られた。</p>
成 果	保育案の討議は回を重ねてきており、議論も噛み合い展望が持てた。ラーニング・ストーリーという海外の保育（の評価）活動は興味を持てた。会の最後は一人ひとりの研究員が研修に取り組んだ思いを語りあえた。

## 2. 先進地の視察研修

視察研修ではとくに「幼保統合」という視点から先進地域を選んで実施した。視察件数は、認定こども園等の幼保一体型施設4件、幼小連携等の実践園3件、国外1件であり、計8件、延べ55人が参加した。この内、近隣の幼保一体型施設視察には貸し切りバスで研究員他21名が参加し、研究員の交流の機会ともなった。

## 3. 講演会

本研修プログラムは現職保育者20名を対象としたものだったが、全市の保育者を対象に、世界の保育事情にも詳しい秋田喜代美氏(東京大学大学院教授)の講演会(テーマ「見直してみませんか 保育で大切なこと」)を平成22年2月21日に奈良県文化会館小ホールで実施した。参加者は270名であった。秋田氏からは「『保育の質』を考える」をキーワードに「子どもの経験から保育過程の質を考える」ことの提起を受けた。研究員にとっては個人で保育をふりかえり、保育の基本を見つめ直す機会となった。講演からは「保育者の専門性」について考察を深めることができた。

参加者からは、「自らの保育をふりかえり、反省する機会になった。明日からの保育に元気をもらえました。」「『保育』にとって基本的に大切な事を学んだように思います」「日々の保育に生かしていきたい」「帰ってすぐ、園の先生たちに話を伝えました」などの声(研究員や当日の参加者アンケートより)が聞かれた。このように、講演会は研究員が自園の保育者と園全体の保育のふりかえりを協働で行う機会にもなった。さらに、研究員以外の多くの保育者にも参加してもらうことができ、保育を語りあう良い機会を提供できた。



会場との和やかなやりとり

### プログラム開発の成果と課題

#### 1. 奈良市「幼保統合の保育カリキュラム」作成への寄与

奈良教育大学では、既に述べたように、平成19年度採択の文部科学省専門職大学院等教育推進プログラム「幼保統合の『保育実践知』教育プログラム」を展開してきた。今日的情勢をふまえたとき、これからの保育者は、幼稚園・保育所いずれにも対応する保育力量が求められるとの認識から、「幼保統合」という用語をかかげ、奈良市教育委員会及び

健康福祉部と連携をとり、双方の保育者の現職研修も視野に入れながら、教育プログラムに取り組んできた。

折しも、奈良市では、第3次総合計画の後期計画（平成18～22年度）において、幼児教育について、地域の実情や保護者ニーズに応じた教育の提供に努めるとともに、幼保一体の総合施設など多様な就学前教育への対応を図り、幼児期を豊かな環境のなかで過ごせるよう、整備に努める必要があるとしている。平成21年4月には奈良市立認定こども園富雄南幼稚園（幼稚園型）が開園した。さらに、平成22年4月には奈良市立認定こども園都祁保育園（保育所型）が開園の予定である。平成20年3月には幼稚園教育要領及び保育所保育指針が告示されたが、奈良市においても「認定こども園」制度の導入も相まって、幼稚園・保育所・認定こども園、どの幼児教育施設であっても目指すべき教育・保育の基盤となる「幼保統合のカリキュラム」が求められるようになった。

そこで、本プログラムでは、奈良教育大学側から横山真貴子准教授を市立幼稚園の園長・教諭と市立保育園の園長・副園長・保育士で組織する奈良市「幼保統合のカリキュラム」委員会に派遣し、横山は委員長職を担った。研究員20名の内、16名も同委員会に参加し、日々の保育実践と本研修での学びを往還させ、同カリキュラムの作成に携わった。

次年度以降、奈良市の各園で幼稚園教諭と保育士が「幼保統合のカリキュラム」を踏まえた指導計画を作成し、実践をくぐらせながら「幼保統合のカリキュラム」を検証し改善を図っていくことになるが、奈良教育大学にも引き続き、協力が要請されている。

## 2．評価委員会の実施

本モデルカリキュラム・プログラムについて、外部評価委員による評価委員会を実施し（平成22年3月6日）、本プログラムに客観的な評価を仰いだ。外部評価委員は、以下の3名の方であった。

上田喜彦氏（天理大学 准教授）

清水益治氏（帝塚山大学 教授）

本山方子氏（奈良女子大学 教授）

委員会ではモデル・カリキュラム報告書（案）を示し、委員からは次のような意見を頂いた。意見への回答や改善点は矢印以下で示した。

1) 「幼保統合」という用語について：制度的な展望を意味する用語なのか、幼保、両保

育者に「共通の」力量等を示したいのか、明確にされたい。

幼稚園・保育所の保育者に共通に求められる保育力量の養成について論じている。が、本プログラムは、制度的に異なる幼稚園・保育所双方の現職者の研修をめざしたことに1つの特徴がある。

2) それでは、「幼保に共通の保育力量」とは何をさすのか。

研修では「実践分析力」の養成を位置づけた。それは「保育案作成」「保育記録の作成」と「保育のふり返し」活動において発揮される力量であることを2-2-2に加筆した。

3) 研修プログラムの効果測定はどうしたのか。定量的評価も欲しい。

研究員の「研修のふり返し」記述報告に加えて、アンケートによる評定も追加実施する。

4) 講義形式だけでなく、演習も取り入れ、研究員の語り合いが重視されている。

5) 教員研修というと単発的な研修が一般的だが、本プログラムでは、「実践分析力の養成」を柱に、順序性も考慮しながら通年的に研修会を展開していることが大きな特徴である。継続することで、研究員も時間をかけて自らの学びを省察することができたのではないかと評価できる。成果も「奈良市幼保統合のカリキュラム」に集約されている。

このように、本プログラムについて総じて肯定的な評価を受けることができた。

### 3. 大学と教育委員会の連携の意義と課題

#### 3-1. 連携の意義

くり返しになるが、奈良教育大学は、幼保 GP の展開にあたって、奈良市教育委員会と2年間、緊密な連携の実績があった。そのときは、主として学生の「保育実践知」の養成という教育の課題に教育委員会の協力を受けた事業であったが、今回は、現職の保育者の研修に大学が協力するというものであった。数から言えば、大学側教員は2名ということで微力ではあったが、連携の要となった教育委員会の尽力で、全体として、大学発案の研修プログラムによって、現職幼稚園教諭・保育士の研修に貢献できたと思っている。

これまで、幼保の保育者の合同研修は、全国的にもその多くが講演を並んで聞くという意味での“合同”を意味してきたと聞く。本研修では、両者がそれぞれの実践例を具体的に示しながら意見を交換するという、文字通りの合同の研修をめざした。とくに、公開保育を合同の研修の場として重視し、また、公開保育以外でも園内公開保育の取り組みの後、

保育案を持ち寄って議論をするなどした。実践をもとに議論し合うことで率直な意見のやりとりが可能となり、実践分析力を磨きあう場となった。それは、幼保双方に共通する子どもの見方や願いを実感する場でもあった。他方、保育の流れの違いから来る力点の違い、長い歴史の違いからくる文化的な違いなどに気付くことは、今日求められる共通の保育力量について考察を深める契機となった。均質な集団による閉じた研修でなく、「幼保統合の現職研修」を追求したことで開かれた研修となり、より効果的な研修となった。

また、これらの成果を、「奈良市幼保統合のカリキュラム」に反映させることができたことは、本研修の意義に一層確信をもたらすものである。このカリキュラムは、引き続き、実践をくぐった振り返りによって修正を受けつつ発展していくものとなるはずである。その際に、本研修で学んだ研究員が、現場の議論をリードしていってくれるであろう。研修が1年を通して行われた結果、幼稚園・保育所の保育者の人的交流の場ともなったことから、本プログラムの今後も幼稚園・保育所の核となる人材として、奈良市の保育界で果たす役割が期待できる。

大学教員にとっても、「理論と実践の往還」の場に臨んで、ワクワクする1年となった。

### 3 - 2 . 研究員の振り返りから

修了後のアンケートでは18人から回答があった。4件法で尋ねたが、「研修に満足している」については16人が「とても思う」、2人が「やや思う」との回答だった。「1年前と比べて保育案を作成する力がついた」「1年前と比べて保育を振り返る力がついた」については、14～16人が「とても思う」「やや思う」と回答した。このように研修全体の評価でも、自己の保育実践力の1年間の変化についても概ね肯定的回答を得た。また「もっと保育力量をつけるために学びたい」には全員が「とても思う」とのことだった。さらに自由記述では、次のような意見が聞かれた。

- ・「大学の先生方の専門的な講義を受け、知らなかったことを知り、取組みを理論的に考えていくことなど勉強になった。他の先生方にも伝えて、保育に生かしたい。」
- ・「幼稚園と保育園との違いに気付くことも研修になったが、幼児にとって何を育てなければいけないかを、もっと話あえればよかった。また、観点の違う意見も聞くことができて良かった。」
- ・「先進地の県外研修は遠方への視察で大変だったが、システムや環境、職員配置等、実際に見ることで学ぶところが大きかった。」
- ・「研究員以外にも研修の機会を広げてあげて欲しかった。」
- ・「幼保合同の研修では違いも多く感じたが、今の子どもを発達の連続性の中で見ていくことの大切さに気付かされた。」

研修会参加にあたっては、幼稚園教諭は平日の参加が一人担任であることから、保育士は土曜日の参加が勤務日であることから、いずれも園のバックアップを受けての参加であったが、その大変さにもかかわらず、学びの機会提供への感謝の言葉が複数寄せられた。

### 3 - 3 . 今後の課題と展望

今後も、教育委員会との連携を継続して大学として現職の実践力養成に寄与していきたい。その際、学生の養成教育とも連動させた現職研修体制ができればと願っている。

#### その他

[キー・ワード：幼保合同研修・実践分析力・公開保育・幼保統合のカリキュラム]

[人数規模 D (研修例会は20人、講演会は280人)][研修日数 D (11～14回)]

#### 【問い合わせ先】

国立大学法人 奈良教育大学 幼年教育教室

〒630-8528 奈良市高畑町 0742-27-9108 (総務課 国際交流・地域連携担当係)

週案 平成 21 年 6 月 30 日 ( 火 ) ~ 7 月 3 日 ( 金 )	
2 年保育年長 5 歳児組 ( 男児 13 名 女児 12 名 計 25 名 ) 担任	
幼児の姿と教師の願い	<p>色水遊びやしゃぼん玉、水鉄砲など実際にやってみておもしろさがわかり、いろいろなやり方を工夫したり試したり友達と教え合ったりして不思議さを楽しみながら遊んでいる。</p> <p>泥だんごづくりでは、固くてツルツルのだんごにするにはどうすればよいかを、自分で試したり友達に方法を教えてもらったりして根気よく試している姿が見られる。汚れるのを気にして泥や砂をさわるのを好まない幼児もいる。教師や友達と一緒に汚れを気にせず思い切り発散して遊んでほしい。</p> <p>うんてい、登り棒、鉄棒など、年少時にはできなかった幼児も友達の姿が刺激となり、何度も繰り返しやってみてできるようになったことを喜んだり、いろいろな技に挑戦したりする姿が見られる。</p> <p>リズム遊びやアイドルごっこでは、自分たちでカセットの曲を鳴らして歌ったり踊ったりすることや、お客さんに見てもらおうことを楽しんでいる。</p> <p>カブトムシやチョウの幼虫などの飼育物が成長し、日々変化していく様子に大変興味をもち発見したことや感じたことを教師や友達に生き生きとした表情や言葉で伝え、成虫になるのを楽しみにしている。</p> <p>転入園児を迎えたことで友達関係が広がると共に、結びつきも深まってきていつも一緒に行動しようとしている。また、年少児にもやさしくかかわり自分の知っていることを知らせ一緒に遊ぶ姿が見られるが、自分の思いを通そうとしたり言葉でうまく伝えられずにトラブルになることがよくある。自分の思いを相手にわかるように伝えるとともに相手の思いも受け入れるようになってほしい。</p>
ねらい	<p>自分なりに目的をもって試したり工夫したり挑戦したりして遊ぶ楽しさを味わう。</p> <p>自分の力を発揮して、友達と一緒に遊びを進めようとする。</p> <p>水の気持ちよさや飼育物の変化、野菜の生長等に興味や関心をもってかかわる。</p>
内容	<p>遊んだ後の汗の始末や手洗いうがいを十分する。</p> <p>プール遊びの約束を守り、水の気持ちよさを感じながら全身を使って遊ぶ。</p> <p>自分の思いを友達に伝えたり、友達の思いを聞いたりしながら遊ぶ。</p> <p>水、砂、泥などの特性に気付きながら遊ぶ。</p> <p>飼育物や栽培物の生長や変化していく様子に関心をもって世話をする。</p> <p>人の話をよく聞き、相手にわかるように話す。</p> <p>遊びにいるものや七夕の飾りを友達と一緒につくる。</p>
環境の構成・及び教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ シャボン玉や水鉄砲などを楽しめるように、いろいろな形の枠や網、石鹸、的などを準備したり、自分たちでも工夫してつくることできるようにモールやトレイなどを用意しておく。</li> <li>・ 運動量や天候により遊びの場や流れを考え、日陰を利用したりビーチパラソルを立てたりして涼しく遊べるようにする。</li> </ul> <p>① 友達とアイデアを出し合って遊んでいる姿を認めるとともに、教師も楽しみ雰囲気盛り上げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ カセットデッキや楽器などを幼児が自分たちで使えるように準備しておく。</li> <li>・ プール遊びが思い切り楽しめるように、ペットボトルシャワー、ビート版、フープ、ロープなどを用意しておく。</li> </ul> <p>① 水に対する抵抗感の個人差に配慮してグループ分けをし、それぞれの段階で十分プールでの遊びが楽しめるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 疑問に思ったことや興味を持ったことを調べたり、見たりできるように図鑑や絵本などを準備しておく。</li> </ul> <p>① 遊びの中で考えついたことを言葉に出して伝えようとしている姿を認め、相手に伝わるようにする為の方法を知らせたり、伝わった時のうれしい気持ちを共感する。</p> <p>① 星に夢がもてるように、七夕に関する紙芝居や絵本を読んだり歌を歌ったり笹飾りをつくったりして幼児と共に楽しむ。</p>

**指導案**    平成 21 年 7 月 3 日 (金)    2 年保育年長    5 歳児組

ねらい	自分の力を発揮し、友達と一緒に遊びを進めることを楽しむ。 グループの友達と協力してゲームをする楽しさを味わう。	
内容	自分が思いついたことや考えたことを言葉や行動で伝えたり友達の考えを聞いたりして遊ぶ。 友達と力を合わせて遊びの準備や片付けをする。 自分たちで遊び方を考え楽しく遊ぶ。 グループの友達と一緒に考えたり答えたりする。	
時間	予想される幼児の活動	環境の構成(・)及び教師の援助(㊦)
8:40	<p>登園する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・親子で野菜の水やりや収穫をする。 持ち物の始末をする。 当番活動をする。</li> <li>・栽培物の水やりや飼育物の世話をする。 好きな遊びをする。</li> <li>・いろいろな水遊びをする。(シャボン玉、水鉄砲、色水など)</li> <li>・砂場や土山で遊ぶ。</li> <li>・アイドルごっこをする。</li> <li>・固定遊具(うんてい、鉄棒、登り棒など)で遊ぶ。</li> <li>・遊びにしているものをかいたりつくったりする。</li> </ul> <p>&lt;雨天の場合&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・店屋ごっこをする。(アイス屋、レストラン)</li> <li>・アイドルごっこをする。</li> <li>・お話遊びをする。(パネルシアター)</li> <li>・遊びにしているものを描いたり作ったりする。</li> </ul>	<p>㊦ 一人一人と元気よくあいさつを交わし、早く遊びたくなるように飼育物の変化や昨日の遊びの続きなどを話しかける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・当番活動の内容がわかるようにカードをかけかえておく。</li> <li>・それぞれの場で友達と一緒に遊びの準備ができるように、遊具や用具を分類しておく。</li> </ul> <p>㊦ 考えたことを行動で表し友達と一緒に遊びを進めている姿を認め、言葉にして返すことで再認識させ、周りの幼児にも知らせる。 教師も遊びの仲間になり幼児が楽しいと感じていることを受け止め共に楽しむ。</p> <p>㊦ 他の遊びの場やぐみの友達と交流して遊べるよう、それぞれの場の遊びの様子を伝える。</p>
10:00	<p>片付ける。 手洗い、うがい、用便をする。 今日遊んだことについて話し合う。</p>	<p>㊦ 月曜日に続きをすることを楽しみにし、使ったものを大切に扱っている姿を知らせ、教師も共に片付ける。</p>
10:40	<p>わくわくゲームをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・グループの代表がカードを引く。</li> <li>・引いたカードにあうことばをグループで考える。</li> <li>・グループで考えた言葉をあてっこする。</li> </ul>	<p>㊦ 友達と楽しく遊んでいた様子を紹介し、話を聞いたり質問をしたりして、月曜日も続きをして遊びたいという気持ちをもてるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児と一緒に作ったカードを用意しておく。</li> </ul> <p>㊦ 幼児と共にルールを考えながら遊ぶとともにグループの友達と考えたり話したりする姿を認めゲームを楽しめるようにする。</p>
11:30	<p>降園準備をする。 降園する。</p>	<p>㊦ 月曜日の登園を楽しみにできるように、予定を話しておく。</p>
反省・評価	<p>教師も共に楽器を鳴らしたり歌ったりして、雰囲気盛り上げるような援助や、シャボン玉の美しさや不思議さを具体的な言葉で表現して共感した。また、色水遊びでは教師もお客さんになって参加することで言葉のやりとりが活発になり遊びがより楽しかった。遊具ではチャレンジカードをつくり、自分の目標を達成しようと繰り返し挑戦する姿が見られたので、その頑張りをも認めたり応援したりして意欲的に取り組めるようにした。</p> <p>わくわくゲームではグループの中でリーダー的な幼児が中心となり、想像力を働かせて楽しみながら考えたり発表したりしていた。教師はなかなか決まらないグループに入り、幼児たちの言葉を引き出せるように具体的に言葉がけをした。個人差はあるが幼児たちの言葉の豊富さに驚いた。今後も継続的にやっていきたいと思う。</p>	

週案 平成21年11月2日(月)～11月6日(土)	
3歳児組(男児7人 女児7人 計14人) 担任	
ねらい	<p>朝、昼の気温差に留意し、衣服の調節ができるようにする。</p> <p>一人一人の思いを受け止め、安心して過ごせるようにする。</p> <p>戸外で思い切り体を動かして遊ぶ楽しさを感じる。</p> <p>友だちといっしょに表現遊びを楽しむ。</p> <p>秋の自然に触れ、自然物で遊ぶ楽しさを知る。</p>
内容及び予想される子どもの活動	<p>戸外で体を思う存分動かして遊ぶ。</p> <p>ブランコ、滑り台などの固定遊具で遊ぶ。みんなで鬼ごっこをする。</p> <p>年中児について園周辺へマラソンに出る。</p> <p>絵本を読みながら、体を動かして表現遊びを楽しむ。(「かいじゅうたちのいるところ」)</p> <p>かいじゅうになりきって大きな声を出す。</p> <p>セリフを覚えて自分で言おうとする。</p> <p>運動遊びを楽しむ。(マット、鉄棒、平均台など)</p> <p>いろいろなリズムに合わせて、カスタネットやペットボトルで音をあわせて遊ぶ。</p> <p>Ｃ保育園へ行き、一緒に散歩したり、遊んだりして親しみを持つ。</p> <p>巡回バスに乗り、園外に出かけることを喜ぶ。</p> <p>Ｃ保育園の子に声をかけ、仲良くなろうとする</p> <p>散歩にでかけ、秋の自然に親しむ。</p> <p>木の実や木の葉を見つけて、拾い集める。</p> <p>一人が発見したことがみんなに伝わり、同じことをしようとする。</p>
環境構成及び援助活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもたちの遊びの様子を見ながら、必要に応じて用具、遊具を出す。</li> <li>・他のクラスとの園庭遊びの時間のかねあいをみて、ゆっくり遊べる時間を確保する。</li> <li>・車に気をつけながら、誘導、伴走して一緒に走る。</li> <li>・順番を待つところは、我先に行くのではなく、譲り合っていけるように誘導し、声をかける。</li> <li>・子どもが覚えたセリフを優先し、子ども主体で絵本遊びを進めていけるようにする。</li> <li>・子どもが乗りやすい曲を選び、ペットボトルを用意する。</li> <li>・バスの中では、他の乗っている人に迷惑がかからないように静かにする。また、出会った人には積極的に挨拶をするなどして、地域の中で育っていることを実感できるようにする。</li> <li>・拾ってきた木の実や木の葉は、分類して容器に入れ、子どもがすぐ手にとって遊びに使えるよう目につきやすい所に置いておく。</li> </ul>

## 子どもの姿 保育士の願い

- ・新入児(9人)、進級児(5人)共にクラスになじむのに時間がかかった。今ようやく自分を出せるようになってきた。
- ・語い量も多くなり、気の合う友だちとかかわりを持ちながら室内外で遊んでいる。
- ・泣いたり困っている子に気をつかう優しい一面もあるが、自分が一番と自己主張することや人の指摘も多い。小さなトラブルはしょっちゅうあるが、話をすると気持ちを切り替え、仲良くできる。
- ・友だちや保育者に自分の思いを言葉で伝えながら、簡単なルールのある遊びをしたり、イメージを共有し、役になりきって表現あそびを楽しんで欲しい。
- ・友だち関係が深まり、遊ぶ子が固定化しやすくなってきているが、みんなで何かをすることを通して、いろいろな子とかかわって遊ぶことの楽しさも味わえるようにしていきたい。

## ねらい

- ・やりたい役を自分で決め、表現遊びをみんなで楽しむ。
- ・ルールのある遊びをくり返し楽しむ。

## 内容

- ・お話に出てくる、かいじゅうや子どもになりきって遊ぶ。
- ・心地よいリズムを感じながら、みんなで音を合わせて遊ぶ。
- ・いろいろないす取りゲームを楽しむ。

## 今日の保育の振り返り

- ・絵本「かいじゅうたちのいるところ」のマックス役は、みんながやりたくて取り合いになるほどで交代をしながら劇遊び的に遊んでいる。絵本が単純なストーリーなので表現しやすく、遊びの部分に、体を動かす運動(今まで取り組んできた、マットや鉄棒など)やリズムにあわせてペットボトルで音を鳴らしながら踊ることを続けている。少し飽きてきているので遊びの部分を選び箱平均台などに換えていこうと思う。
- ・いす取りゲームは、今日で2回目だった。みんなで楽しめることを大切に、いすを減らすことはせず、全員が座れるようにした。子どもたちが自分で考えた行動を認めながらいるんないす取りゲームの楽しみ方があっていいと思い進めた。今日はどの子も楽しんで参加することができたと思う。ルールのある遊びをするときは、興味や関心に個人差があるので誘いかけやルールの伝え方を一人一人に合わせるようにしている。これからも一人一人の個性を上手く引き出して、子どもが主体的に活動出来るような保育をしていきたい。

## 公開保育に参加した先生たちから

- ・4月からの積み重ねで、一人一人を大事に受けとめてきた経過をうかがうことができた。
- ・人の指摘をする姿をどうとらえるか、ということが出されたが、他の人の姿が見えてきた発達過程ととらえ、子どもにプラスの気持ちを持って言葉を返していくのが保育のプロとしての接し方ではないか。
- ・丁寧な保育、継続していくことの大切さを感じた。
- ・3歳までは十分にのびのびさせてあげれば良い、それが4,5歳になって力を発揮できる原動力になる、などの意見が出された。

時間	予想される子どもの活動	環境構成	保育者の援助と留意点
8 : 3 0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・登園する。</li> <li>・あいさつをして、持ち物の始末をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>登園した子から戸外に出る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あいさつをして笑顔で迎え子どもと会話しながら心身の健康状態を把握する。</li> </ul>
10 : 0 0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・戸外で十分からだを動かして遊ぶ。</li> <li>・友だちを誘って遊ぼうとする。(鉄棒、うんてい、回転ジャングルジム、ジャングルジムなど)</li> <li>・マラソンをし、カいっぱいはしる。少しでも前へ行こうとする。</li> <li>・さっさとすませる子と時間がかり、なかなか部屋に入れない子もいる。</li> <li>・みんなで歌を歌う。</li> <li>・カスタネットでリズム打ちをする。</li> <li>・絵本を見るときは、どの子も見えるように気を配る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな遊びができるように遊具や用具を準備しておく。子どもたちの遊びや要求に応じていつでも取り出せるように整えておく。</li> <li>・車には十分気をつけて園外に出る。</li> <li>手洗い、うがい、お茶を飲んで休憩する。</li> <li>・サークルタイムができるように椅子を並べておく。</li> <li>サークルタイムをする。</li> <li>・お休みの子に気づかせる。</li> <li>・絵本を見る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気持ちの切り替えが出来なかったり、みんなの中に入っていけない子には、一緒に遊んだり、遊びを提示しながら少しずつ気持ちをほぐしていく。</li> <li>・一人一人の力に合わせて無理なく走り、走ることが楽しいと感じられるようにする。</li> <li>・保育士も一緒に手洗いしながら丁寧にするよう声をかける。</li> <li>・子どもの話すことをのがさず共感し、みんなに知らせて共通理解できるようにする。</li> <li>・声の大きさや語りかけを工夫し、お話の楽しい雰囲気や伝わるようにする。</li> </ul>
10 : 1 5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分でやりたい役を決め、自ら動いたりせりふを言おうとする。</li> <li>・順番を待つところで、先に行動しようとする。</li> <li>・運動遊びやリズム遊びを喜ぶ。</li> <li>・始め知らない保育士に座りに行こうとしない子もいる。</li> <li>・慣れてくると、我先に座ろうとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リズム室に移動し、絵本にそって表現遊びをする。(かいじゅうたちのいるところ)</li> <li>・リズム室を広く使う。</li> <li>・運動遊びの用具を出しておく。準備や片付けも子どもと一緒にする。</li> <li>・補助につき、安全に配慮する。</li> <li>人間椅子取りゲームをする。</li> <li>・参加の保育士さんにまわって座ってもらう。</li> <li>・人が足りない数だけ椅子を用意しておく。</li> <li>・音源を用意しておく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現遊びの役決めは、子どものやりたいという気持ちを考慮し、子どもが選んでできるようにする。</li> <li>・自分なりにイメージしたことを楽しく表現している姿を取り上げ、他児にも伝わるようにする。恥ずかしがって動きの固い子の姿も見守っていく。</li> <li>・いろいろな人に接しふれあう機会を日頃からつくり、いつでも自分の力が発揮出来るようにしていく。</li> </ul>
11 : 2 0		給食準備をする。	